

氏 名：大 宮 裕 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 6 9 号

学位授与年月日：平成 2 9 年 3 月 1 5 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：急性期病院を経て療養病床で働く中堅看護師のライフストーリー

LIFE STORY OF PROFICIENT NURSES WHO MOVED IN THE
LONG TERM CARE WARD FROM THE ACUTE HOSPITAL

論文審査委員：主査 本 庄 恵 子

副査 坂 口 千 鶴（正研究指導教員）

副査 佐々木 幾 美（副研究指導教員）

副査 福 井 小紀子

副査 安 部 陽 子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の動機と背景】

日本の高齢者人口は 26.0%に達し、加齢や疾患により身体機能に障害がある高齢者が増加する中で、出来るだけ住み慣れた地域で暮らせる支援が求められている。療養病床は、急性期での治療終了後も継続して治療が必要な患者を受け入れ、在宅や施設に移行する機能を持っている。しかし、入院患者の多くが医療依存度の高い後期高齢者で、在宅復帰や介護施設への入所が困難となっている。今後、高齢者の在宅復帰等の社会的ニーズを満たすためには看護の質向上が必要となり、その中心的役割を担うのは看護師である。療養病床で働く看護師は、その 8 割以上が療養病床以外での就業経験があり、そのうち約 6 割は急性期病院での勤務経験を有し、経験豊富で実践能力が高いと考えられる。しかし、一般病棟から療養病床に移った看護師の多くは、高齢患者の割合の高さや今まで経験してきた看護実践との違いに戸惑いや不満を感じているとの報告がある。そこで、同様の経験のある研究者は、修士課程に進学した際、療養病床での看護に葛藤している中堅看護師を対象に高齢患者の生活行動への援助に関する研究を行った。その結果、中堅看護師に看護実践へのやりがいと自信をもたらすことができたとの示唆を得た。しかし、その数年後参加者であった中堅看護師が皆退職したことを聞き、自らの体験から高齢患者の生活行動の改善を目指したが、自分はどこまで彼女らの思いを理解していたのか疑問を持った。療養病床で働く看護師の思いを深く理解するためには、これまでの急性期病院での経験やライフイベントとの繋がりも踏まえた上でどのような思いで看護を実践しているのか探求する必要があると考えた。

【研究の目的】

急性期病院を経て療養病床で働く中堅看護師がどのような経験を経て療養病床へ入職し、入職

後どのような思いを抱きながら看護実践を行なっているのか、ライフストーリーを用いて明らかにすることである。

【研究の意義】

急性期病院を経て療養病床で働く中堅看護師が看護実践の際に抱く思いを、急性期病院での経験やライフイベントとの繋がりの中で捉えることができ、看護師としてやりがいを持って働き続けるために必要な教育、管理等の組織としての具体的な支援が明確となる。

【研究方法】

研究デザイン：ライフストーリーの研究方法を用いた質的記述的研究。**研究参加者**：臨床経験5年以上かつ療養病床での勤務経験が3年以上で、年齢45歳未満の管理職には就いていない看護師とした。**データ収集**：McAdams（2013）のライフストーリー・インタビューを参考に、参加者一人につき1回60～150分程度のインタビューを2～3回行った。**データ分析**：Habermas & Bluck（2000）のライフストーリーにおける時間的・因果的・主題的一貫性の概念を分析の枠組みとした、Pals（2006）の分析方法を参考に行った。インタビューで得たデータを逐語録に起こし、丁寧に読んで全体の内容をつかんだ後、時間の流れに沿って再構成し、看護を実践する際に抱く思いについて抽出、コード化、パターンの構成の3段階を経て行った。**倫理的配慮**：日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会にて承認（No. 2013-81）を得て実施した。

【結果】

研究参加者は、療養病床を有する病院に勤務する40歳代前半の女性3名で、急性期病院での経験は6～10年、療養病床での経験は3年半～8年であった。研究参加者は仮名を用いて、久保田さん、加納さん、齋藤さんとした。

1. 久保田さんのストーリー

母親から子育ての協力を得ながら急性期病院で働き始めた久保田さんは、患者の緊急事態に皆で協働して患者のためにテキパキ動ける看護に楽しさを感じ、母や妻だけではない看護師としてできる自分を実感していた。しかし、勤務異動により慣れない病棟で病棟責任者に就き、医師や看護スタッフと関係が築けず、初めての師長代理で協力が得られない辛さを感じ、さらに子育てと夜勤も行う管理職に疲弊して勤務異動を願い出た。異動した療養病床では意思疎通の図れない高齢患者の急変に動けない自分を感じ他の急性期病院に転職したが、今度は実母の病気でやりたい看護と子育てを両立する難しさに、再び他の療養病床へ異動した。二度目の療養病床での久保田さんは、重篤な状態に心電図モニターもつけず、誰にも看取られることなく亡くなる高齢患者の存在に看護師としての無念さを感じていた。若い看護職に高齢患者の看護を伝えていく難しさを感じながらも、高齢患者の異常の早期発見などを通して急性期病院へ心が揺らぐ中で気づいた看守る看護を得ていた。

2. 加納さんのストーリー

社会人から看護師になった加納さんは、患者や家族のための看護で得た周囲の承認によって看護師である自分を感じていた。しかし、多忙な病棟でのシフトに加えて、委員会等の活動に学生

指導等の役割も加わり、**中堅看護師になるに従って徐々に大きくなる負担感**に私生活も削られ疲弊困憊した。その上、母親の介護も重なって徐々に追い込まれ、療養病床へ異動した。療養病床に異動した加納さんは、多くの高齢患者が認知症等のためにコミュニケーションも取れない状態で、家族も高齢で面会が少なく、信頼関係の構築に難しさを感じた。また、医師との上下関係や准看護師との間に壁を感じた加納さんは、高齢患者や家族について相談や意見交換ができないことにこれまで培ってきた**看護師としての判断が認められない不満**を感じ、同時に**患者のための看護が伝わらないもどかしさ**も抱いていた。しかし、急性期病院で取り組んでいた看取りケアを活かして実践した内容を詳細な記録として残したことで、他の看護師も同じ関わりをしていたことを知り、また医師や看護師長から認められたことは、加納さんにとってとても嬉しい出来事となった。組織全体を変えることは難しいが、まずは自分一人から始める**高齢患者中心の看護**に気づき、その実践を進めていこうとしている。

3. 齋藤さんのストーリー

個人病院で患者の状況を理解できないまま医師の指示に従ってきた齋藤さんは、急性期病院での看護実践を通して、**患者の状況を理解して看護できる充実感**を得ていた。しかし、多忙な病棟でのシフトに加えて、委員会活動や後輩への指導等の役割も加わり、結婚や引越しというイベントも重なる中、一人で背負う**仕事の負担**に体調を崩してしまった。休息を取って療養病床に転職した齋藤さんは、高齢患者の状態の悪化に十分な検査や治療を施さない実態に驚き、**高齢患者の状況を理解できないまま関わる戸惑い**を感じた。療養病床での医療に困惑した齋藤さんであったが、3年を経て委員会活動に参加したことがきっかけとなり、高齢者の可能性を見据えた病院の理念を理解し、それに向って組織が取り組んでいることを実感した。さらに、レクリエーション等を通じた高齢者との関わりの中で、高齢患者の可能性や変化を感じることができ、また無理に検査や治療を行なうことが決して高齢患者にとって最善ではないことにも気づいた。これらの経験を通して、齋藤さんはこれまで自ら目指していた看護を**高齢患者の尊厳と可能性に働きかける看護への気づき**と再構成し、率先して高齢患者と家族ためのケアに取り組み、**多職種連携の中で高齢患者と関われる満足感**を得ていた。

【考察】

A. 急性期病院における看護師としての有能感：参加者にとって急性期病院での看護は、患者を中心に皆で協力し合い、周囲から肯定的なフィードバックを受け、患者の状況を理解できる中で自律的に実践できる看護師としての有能さを感じることができた。しかし、中堅として仕事での役割が増えて行く中で私生活との両立が困難となり心身ともに疲労困憊して、看護師としてできる自分を感じることもできず、継続して働くことを断念せざるを得なかった。

B. 療養病床で揺るがされる看護師としての自分：仕事と私生活との両立を図るため療養病床に異動した参加者は、高齢患者の状況を理解できないまま関わることに戸惑いを感じ、これまで自分が信じてきた患者ための看護を伝える難しさや承認されない不満等を抱え、看護師としての自分を大きく揺るがされることとなった。また、これまで信じてきた看護を伝えられないことから医師や他の看護師との関係性も取れないまま、組織の役割からも距離を置き、積極的な姿勢が失われていった。

C. 新たな一歩につながる自分の信じる看護に向き合うこと：入職して3年以上経った参加者は、これまでの急性期病院での経験との違いに戸惑いや不満を感じながらも、これまでの自分の看護を振り返り意味づけながら、高齢患者を看守することに意味を見出し、一人だけでも高齢患者のための看護を実践する意思を示し、また組織の中で連携し高齢患者の看護を行っていくことに新たな気づきを得ていた。仕事から距離を置くことで自律して実践できる自分とは何かを確認する中で、新たな気づきを得た参加者は療養病床での仕事の役割や責任を引き受ける姿勢へと変化していた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、急性期病院を経て療養病床で働く中堅看護師を対象に、これまでの経験とのつながりの中で療養病床での看護実践の際の思いについて、ライフストーリーを用いて明らかにする目的で実施されたため、テーマを「急性期病院を経て療養病床で働く中堅看護師のライフストーリー」と修正することとなった。また、研究の内容については下記のような評価を得た。

研究方法として、生涯発達の視点をもとにライフストーリーの研究手法を用いて詳細な分析を行ったことが評価された。特に、急性期病院から療養病床という2つの組織を超えた長期的な視点で、中堅看護師がどのような思いを抱えて看護実践を行っているのかを深く記述した点で、研究としてのオリジナリティがあるとの評価を得た。

また、急性期病院で経験を積んだ看護師が、療養病床に異動した際に感じる戸惑いや不満、看護への迷い等の根底には何があるのか、そしてライフイベントも含めた様々な困難を乗り越えて看護師を続けたい思いとは何か、当事者の視点を通して詳細に描けていることに意義があるとの評価を得た。

さらに、急性期病院を経て療養病床に異動した看護師について、治療中心から生活機能中心への看護に転換する必要があると言われていたが、中堅看護師がこれまでの急性期病院での経験を療養病床の看護に活かしていくことが、高齢者看護の質の向上につながり、看護師としての自分に新たに気づくことが明らかとなり、新たな示唆として評価された。

今回の研究を通して、看護へのやりがいを短期間で捉えるのではなく、人生という長いスパンを通して、時に看護から距離を置いたり、また再起したりと柔軟な視点を持って捉えることが、看護師として働き続けていくために重要であるとの新たな示唆も得られた。

本博士学位論文審査会では、学位規程第3条により、審査の結果、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。その後、最終試験を行い、「合格」と認めた。